

概要

2011年【古典を読む-歴史と文学-】
「いま明かされる古代X X VIII」

第3回 平安時代の国衙行政 と貴族社会 - 受領の支配の実態を 手がかりに -

開講日時： 7 / 2 (土) 午後 2 : 3 0 ~ 4 : 3 0

講義会場：金鷄会館(国登録有形文化財)宝形塔屋講義室

講師：京都橘大学 文学部 歴史学科 教授
増渕 徹(ますぶち とおる)先生

概要：平安中期は、現地に赴任する国司官長（受領）による専断的な地方統治が行われた時代として知られる。『今昔物語集』に載せる信濃守藤原陳忠の話はその代表例であるが、『御堂関白記』などの貴族日記にも、信濃守を含む当時の受領の生態を記した事例が散見される。強欲さが強調されがちな受領の支配だが、中央財政が地方財政に依存する古代国家においては、彼等は国家財政を現実面で支える先兵としての性格ももっていた。受領の支配の特徴はどこにあるのか、そして彼等と中央の貴族政権との関わり合いはどのようなものなのか、受領たちの努力面に眼を向けて考えたい。